

テント一週一文（ま）——『信仰・希望・愛——青柳行信 半生記』（1）：聖書との出会い

はじめに

2018年も明けて2週間ほど経ったある日の午後、一仕事が終わって会社に帰るまでには少し時間があるので渡辺通りを歩いてみました。正午ごろから雪がチラチラし始めた冷たい日でした。

こんな寒い日だからテントは開いてはいないだろうと思っていたのですが、九電本社前に黄色い旗が立っています。九電本店の建物側から防寒用に張ってある透明のビニールシートを通してテント内を覗くと中には人影が見えません。「誰もいないはずはないのにな〜」と右側の「入口」の方に回ってみました。「入口」シートをかいくぐって「こんにちは〜」と中に入ると、コーナーで厚い本を読んでいた青柳さんが本から顔を上げて「いらっしゃい」と椅子を勧めてくれます。他に人はいません。珍しいことに一人だけです。

テントの周囲には脱原発のモットーを書いた横断幕や催し物の宣伝を掛けているのですが、外からはその横断幕にさえぎられて彼の姿が見えなかったのです。

「今日はお一人ですか？」

以前自家製の干し柿を差し入れてくれたAさんが来ているのだが、「用があるのでちょっと留守にしま〜す」と出かけている、とのこと。

「失礼します」とイスに座ると、目の前の机に「青柳行信 プロフィール」とタイトルが大きく書かれた古びたB5版の冊子が置かれています。冊子にしているし、タイトルも手書きではなくワープロでの印字です。単なる覚書ではなく、何かの報告書用に整理したものと思われます。私がそれに気付くと、青柳さんが「さっきまでそれを見ながら昔のことを思い出していたのです」と、ちょっと言い訳気味に説明します。

「今までの半生を回顧していたのですか？」

「回顧というわけじゃないけど、いろいろあったな〜と思い出していたのです」

「今はほとんどA4紙を使用していますが、これはB5版ですから昔の資料ですね」

「10年くらい前かな」

「少し見せてもらってもいいですか？」

「どうぞ、どうぞ」

と言われて冊子を開いてみると、ワープロ文で数ページにわたっておおまかな年代順に活動の内容を記載しています。一つの活動は数年ごとのグループにまとめて、それを年代順に記載してあるので、青柳さんの活動は一時期には一つの活動に集中していたと思われます。それをめくってみて、青柳さんの経歴に接することになりました。

以下は、そのプロフィール拝見を契機にして、青柳さんから直接聞いたり、資料を見せていただいたりしてまとめた青柳さんの経歴や活動の報告です。口頭での説明は、書かれたプロフィールのように簡潔に、時間順に、箇条書き的には進みませんので、テーマや話題が前後することもあります。また、私が報告する形式も決まってはいません。今回の（1）のようにインタビュー式にまとめたり、あるいは報告的文書にしたり、日記的記述にしたり、もし可能なら独白まがいの文体も、と色々かと思えます。

さらに、青柳さん手持ちの資料や写真も掲載するかもしれませんが、途中で今までの「一週一文」に類する報告や紹介などを差し挟んだりすることもあります。このように、『信仰・希望・愛 —— 青柳行信半生記』というタイトルの青柳さんの経歴説明は形式的には不統一、時々中断発生の長丁場になります。お付き合いください。

生まれたのは…

インタビュアー（以下：イ）：失礼ながら最初に年齢のことをお聞きしますが、青柳さんは今年2018年は72歳になられるそうですね。

青柳氏（以下：青）：そうです。1946年生まれです。

イ：お生まれは福岡県ですか？

青：福岡県です。現在住んでいる福岡市吉塚のすぐ東の二又瀬です。徒歩で10分ぐらいしか離れていません。父は鉄工所をやっていました。

イ：今もありますか？

青：ありません。従業員一人という零細鉄工所でした。

イ：お父さんとお母さんが一緒に働いているという……

青：母は鉄工所では仕事はしていませんでした。近くの農家に手伝いに行っていました。

イ：お父さんが鉄工所をやっていたと言いますと、お祖父さんが鉄工所をやっていて、お父さんがあとを継いだという形ですか。

青：いいえ、祖父は大工でした。

イ：ああ、そうですか。ごきょうだいはい？

青：5人です。息子は私だけで、4人が娘です。これが私の一生にも関係しています。

イ：一生？

聖書との出会い

青：私の一生はキリスト教との出会いを抜きにしては語れません。

イ：お父さんはキリスト者ですか？

青：いいえ、そうではありません。父は近くの浄土真宗のお寺の墓守もしていました。

イ：鉄工所で仕事をしながらですか？

青：そうです。

イ：キリスト教との出会いはまったく個人的、と言いますか、偶然の出来事ですか？

青：偶然と言っているかどうか……。高校2年生の時ですが私はドストエフスキーやトルストイというロシア文学を読むようになりました。それに聖書の言葉が出てきます。その言葉に興味を持ちました。でも私の生活は朝起きてから仏壇に線香を立てて、ご仏飯を供えてお経を読むのが先ず仕事という日常でした。

イ：聖書とはあまり関係ないですね。

青：小説の中での、特にドストエフスキーの小説に出てくる聖書の言葉には興味を持ったのですが、聖書は仏教の経典のようなもので普通の人には手に入らない本だと思っていました。

イ：仏教の経典を手に入れるのは簡単じゃありませんものね。お寺の方は別でしょうけど。

青：その頃まったくの偶然ですが、岩田屋の書店に行ったときに棚に聖書があるのに気付きました。聖書って経典と違ってすぐ手に入るのだと初めて知りました。驚きました。急いで買いました。そして読んでは聖書の中の言葉をノートに書き込みました。

イ：どんな言葉ですか？

青：「愛」に関する言葉が多かったですね。同じ頃ヘルマン・ヘッセの『ゴータマ・シッダルタ』も読みました。これは仏教ですね。『ゴータマ・シッダルタ』の愛には心を動かされませんでした。聖書の愛に引き込まれていきました。

イ：文学を通じて聖書を知り、聖書を通じて愛とは何かに関心が向かった、というわけですね。

青：同じ頃『キング オブ キングズ』、これはイエス・キリストですね、という映画があって、これを観に行ったことも覚えています。ちょっと待ってください。「聖書を通じて愛とは何かに関心が向かった」というだけでは不十分です。聖書を通じて人はどのように生きるのか、何のために生きるのか、に関心が向かった、とも言えます。

イ：それが高校2年生の時ですね。

青：2年生から3年生にかけてです。

(以下次号)

(文責 栗山次郎) 2018年1月29日公開